

嵐牛日記に見る維新前夜

加藤 定彦

はじめに

嵐牛は遠江国佐野郡汐井河原（現、掛川市八坂）の俳人。寛政十年（一七九八）生、明治九年（一八七六）五月二十八日没（79）。俗名、伊藤清左衛門豊蔭。別号、柿園・白童子など。卓池門。国学・和歌を近隣伊達方だてがたの石川依平よりひら（五一〜一五七）に学ぶ。農業と鍛冶職を兼ねる。家督を譲ってから俳諧に専心、遠州に多くの門人を擁した。柿園社中の発句集に『そのまゝ集』初編（安政三年・一八五二）〜六編（明治四年・一八七三）が有り、没後に平台編『嵐牛発句集』（明治十三年・一八八〇）が刊行される。

嵐牛の旧蔵書や遺墨類はご子孫伊藤鋼一郎氏宅に襲蔵され、俳書については故田中明氏と倉島利仁氏によって整理され、『俳諧静岡』103〜109、111〜115号に「嵐牛蔵美術館蔵俳書目録稿 版本の部」が連載された。写本の部は素稿を作成、嵐牛資料集に決定稿を収録する予定である。

注記を加え、虫損・不明部分は「」で示した。

I 尊王攘夷と安政の大獄

正月十三日、晴。ふじ丸まろ、来泊。

『言葉正道 三』野々（之）口隆正著

都にこと有し時

高ねにはさはらざりけり大うちちの山の下風立さわぐと

も 隆正

（注）「ふじ丸」は菊川市丹野住の門人。「野之口隆正」（一七五〜一八七）は国学者・歌人。本姓今井氏。津和野藩士の子として生まれ、家督を継いだ脱藩・亡命し、野之口と改姓。国学を平田篤胤に学び、和歌・音韻学を村田春海に学ぶ。岩見国大國村で大國主命の古跡を発見、以後、大國を姓とした。「都にこと有し」は、前年（元治元年）七月十九日の「禁門の変（蛤御門の変）」をいう。

十六日、けふも雨。今日ハ諸人來ず、静也。三吟（ふじ丸・禾守と）、日を暮す。

おろかなる身にも弓矢の幸を得て都の花とちるぞうれしき

大和水郡 浅香光徳二男

五郎武「貞」

る。それらの主要なものは、昨秋（二〇一四年）、掛川市立大東図書館において特別展を催した際に出品し、展示目録解説「ふるさとの俳人嵐牛とその仲間たち——芭蕉から十湖まで——」を発行した。その中に、慶応三年（一八七二）、同四年（一八六八）の日記二冊が含まれ、ほかに未製本で、俳書『早緑集』六編（嘉永四年・一八五三）などの紙背を利用した元治二年（一八六一）の日記も伝わるが、難読で、しかも元日から三月三日までの短期間のもので、解説を見送ろうとしたけれども、読める部分だけでも活かそうと解説したところ、意外にも他の日記二冊にない、維新前夜の動乱を垣間見させる重要記事が散見する。よってそれらを摘録、略注や解説を付し、幕末俳人の関心のありようと時代状況を窺う資料としたい。

なお、原文の引用は通行の字体に改め、濁点や句読点、漢文には返り点や送り仮名・振り仮名などを施し、誤字には正しい字を（ ）入りで傍記し、人名などには適宜

ものゝふのつくす誠ともみち葉はちりての後ぞにしき
成けり おなじく

攘夷祝 河内人浪士 伴林六郎光平

処得し古やの軒の蜘蛛の巣も払掻くべき時は来にけり

辞世

君が世はいはほと共に崩れくだけずばくだけてかへれ沖津

しらなみ

——七首省略—— 是迄光平

ますらをのいはほをくたくごぶしにも手をればかをる
山ざく「ら花」

大坂住隆正男野々（之）口正武

（注）「安積五郎武貞」は、江戸呉服橋の住。父光徳は易者でもと飯田忠蔵。銚子から江戸に出て売卜家安積光角に入門、師の没後その跡を継ぐ。五郎は東条一堂の漢学塾に入門、清河八郎と親炙、尊王攘夷の志士として行動をとにもすることが多かった。文久三年（一八六三）八月、天誅組の乱に参加、九月に捕縛され、翌元治元年二月十六日、京都六角の獄舎で処刑される（37）。「大和水郡」との記述意図は不明。天誅組の中山忠光らは伏見から乗船、淀川を大坂へ下り、八月十六日、堺に上陸、河内富田林甲田の豪農で勤王家として知られる水郡善之

祐邸に宿泊、翌十七日、楠正成の首塚に参拝、必勝祈願をして千早峠を大和国へ越え、五条の代官所を襲撃する。「おろかなる」の和歌は『殉難後草』（慶応四年刊）に辞世として所収するが、水郡邸で同志とともに詠み遣した詠かもしれない。「浅香」と誤記するが、徳田武の論稿によれば「安積」とのこと。詳しくは同氏「安積五郎と清河八郎」（『明治大学教養論集』418・425・430・441（二〇〇七・三）二〇〇九・一、未完）参照。

朝廷は文久二年（二八六）九月二十一日、「攘夷」を決定。

「伴林光平」は浄土真宗の僧。還俗して加納諸平らに国学・和歌を学び、勤王派の志士となり、文久三年（二八三）八月、天誅組の大和拳兵に加わって逃亡中、奈良と大坂の境岩船山で捕縛され、元治元年（二八四）二月十六日、京都で処刑された（52）。辞世の歌は、伴林家（松岸寺）蔵の文久元年四月自画像賛（武田弥富久著『天誅組義士伴林光平一代記』大正六年刊、口絵図版）や藤井寺市尊光寺（生家）前の歌碑などには上句下五が「動かねば」とある。

正月廿四日、今朝、俳諧満尾。殊之外二長風交にて、都て十日。

其後久々御便もなく、如何と案じ罷在候。愈無御別事一候や。夏頃之返事はいかゞ。頃日、例の秋す

馬田江四世。塞馬筆録の俳人名録に「可庭 浪華・南本町一丁目 馬田江 更 公眠」（深津三郎編『板倉塞馬全集』。編著に『鈴音集初篇』（内題「類題鈴の音集」、万延元年・一八〇序、禾守・陽谷校合）。「禾守」は正月十日の記事に「帰来」とあって、一旦来訪してから再訪、嵐牛と風交後、二月廿二日、吉田の蓬宇を訪問、三月三日にかけて両吟、『蓬宇連句帳 十八編下』巻末に「禾守 大坂大宝寺町三休橋東へ入高津橋 馬田江耕平号、三大居」と記される。

■以下、摘録する記事はすべて正月廿四日の筆録。

○土州屋敷裏門之橋に懸候首之添書

此方從二先年一種々様々姦佞之手伝被_レ致、其身高位二乍_レ在不儀之栄花を極、島田左近之余、悪人へ心を通じ、家来加川肇を以、高位高官之方々を悪道へ引入、実二有間敷国賊也。依_レ之乍_レ憚、是頭を申請、此処迄致_レ持参、居へさらけ可_レ被_レ下候。

下立売千本東へ入

國中浪士

千種殿家来 加川肇 年四十五才

右、肇方へ廿八日四つ時分、帯刀人五人計被_レ越、肇ばかり及_レ殺害、首持帰、壁二左之通設置。

り出来候而、夫々差出候間、尚積_二為_一御聞一有がたく候。上方風説とりど、形勢不_レ一様子、何とぞ早く治り候様にと、日夜相念じ候事也。さて当五月上京、学習院へ参上、報国之一端にもと建白二及候所、東久世殿等、御披露之由、非藏人面々茂、御書付も申受候。此儀、当方にてはひめ置候得ども、乍_二極内_一申入候。御よろこびあり度候。何分独手間、委細不能に不_レ尺候。

八月廿三日

公眠

禾守子 まゐる

一猶々書き、省略一

（注）「長風交」は禾守を迎えて門人富士丸と巻いた連句四巻を指し、嵐牛の書留め『元治二年俳諧とめ』所収の三吟歌仙の末尾に「右、正月十五日始、廿四日満尾」と書き込む。「学習院」は、弘化四年（二八七）、京都御所に設置された、公家の師弟の教育機関だが、尊王攘夷派の拠点ともなった。「上方風説とりど」、形勢不_レ一様子は文久三年（二八三）八月十八日の公武合体派による宮中尊攘派一掃クーデターを指し、三条実美ら七卿が長州に逃げ落ちていく（所謂「七卿落ち」）。「東久世」はその一人で、東久世通禧。したがって、本書簡は政変のあった直後、文久三年八月二十三日の執筆。「公眠」の人物は不明だが、『瓢之種』（明治二十年）によれば

壁書

此一条二付、町内めいわく懸間敷様、取置可_レ有之事。

- 一 献毒之事
- 一 叡山僧呪詛之事
- 一 両嬪之事
- 一 島田之事
- 一 近衛老婆之事
- 一 岡本肥後守之事
- 右、加川罪状者○_{目明し}文吉白状也。
- 一 与力加納・渡部_{（辺）}申合之事

一 正月十五日之夜、両嬪之奸、再出内願さし出候所、御下ゲ二相成、十二月廿九日、大炊御門、千種殿同意にて高畑式部女宅へ参り候事。右二付、加_二誠戮_一候也。

（注）右は文久三年（二八三）京都で起きた事件の書留めで、公眠から翌元治元年（二八四）八月廿三日付で禾守宛に送られた書簡とともにもたらされた情報か。「賀川肇」は島田左近の志士弾圧に協力、千種と京都所司代の用人の間を周旋するなど志士の憎しみを買い、文久三年（二八三）一月二十八日、押し入った土佐勤王党の岡田以蔵らに斬殺され、壁に罪状が貼られた。「土州屋敷」は中

京区備前島町、現在、立誠小のある辺で、東側を高瀬川が流れ、橋が架かる。土佐藩主の山内豊信（のちの容堂）

はこの年正月上京、公武合体のために種々の画策をする。しかし、賀川肇の首級は一橋慶喜の宿舎、東本願寺の太鼓樓上に晒されたようで、土佐藩の屋敷とするのは「六日の夜又千種家に出入せる唐橋村総助を斬り、首を松平容堂の河原町藩邸の裏手なる高瀬川の小橋の傍に置き、攘夷の血祭として轅門に献ずる由の木札を建て」（沢栄一著『徳川慶喜公伝』大正七年刊）た件と混同したもの。「島田左近」は島田左近正辰で、九条家の侍。当初、修好通商条約調印に反対であった九条尚忠を幕府側の賛成派に内応させ、紀州藩主徳川慶福（のち家茂）を次期將軍に擁立させた。安政の大獄では、井伊直弼の指令で尊王攘夷派の志士たちを次々と捕縛、弾圧した。文久二年（一八六三）七月二十日、志士らに暗殺された。「目明し文吉」は島田左近の手先となって志士を摘発した人物。やはり暗殺された。当時、宮中の尊攘派は、公武合体を画策し皇妹和宮の降嫁を推進した久我建通（内大臣）・富小路敬直（中務大輔）・岩倉具視（左近衛権中将）・千種有文（左近衛権少将）の四卿を「四奸」、岩倉・千種の妹堀河紀子（右衛門内侍）・今城重子（少将内侍）の二人を「兩嬪」、併せて「四奸兩嬪（二嬪とも）」と称して弾劾した。尊攘派志士の暗殺予告の威嚇などもあつて、朝廷は岩倉ら公武合体派の公卿や女官を蟄居処分と

「守之事」は、同年六月二十六日、皇居堺町御門下馬札の下に、島田左近・加納繁三郎と通謀、近衛忠熙・三条実万らを落飾させた罪科により天誅は免れないと張紙された典藥寮岡本肥後守保徳が、恐怖のあまり高野山に逃れた件。「与力加納・渡辺」はともに京都西町奉行所与力で、加納繁三郎と渡辺金三郎。志士弾圧の先鋒だったため志士らに狙われ、危険を察知した加納は京都を脱出して無事、渡辺は文久二年九月二十三日、ほかの与力三名とともに江戸に下る途中、追跡されて近江国石部宿で斬殺される―以上、復刻版『維新史』（吉川弘文館、昭和五十八年刊）ほか参照―。「大炊御門」は権大納言家信（一八八〇）。「高島式部」は伊勢国松阪出身の女流歌人（一七五〇―一八八〇）。香川景樹門、後、千種有文の男有功に師事。賀川暗殺の翌日、身の危険を知らされ、その夜中、救いをもとめて勤王歌人松尾多勢子の仮寓を訪れ、松尾家の定紋の付いた提灯を借り、志士らの包围網を突破、大坂を経て名古屋まで落ちのびる（松尾多勢子伝）、『下伊那郡誌資料』第六輯（大正二年刊）及び昭和五十二年復刻版中巻所収）。

○垣堂先生「簞笠記」―拔萃―

安政六己未年（一八五九）正月元日壬申、癸酉立春也。

四日、有「沙汰」之、二条奉行詰問、遂遭「厄」。六日、七

し、辞官・落飾を請願させた。「献毒之事」は、四奸（四卿）が天皇に寵愛されている堀河紀子を使嫉し、皇妹和宮の降嫁に抵抗する天皇の暗殺をはかって鳩毒を盛った疑いがあるとの書付けを志士が四奸の邸に投じ、二日以内の洛中退去を勧告・脅迫した件。「兩嬪之奸、再出内願」は堀河・今城兩名復職の動きをいう。「近衛老女之事」は、安政の大獄で処罰された津崎矩子（のりこ）のことに、十三歳のときに近衛家に出仕、中臈を経て老女となり、村岡（局）を称した。主公近衛忠熙の信厚く、安政三年（一八五〇）島津斉彬養女篤姫が忠熙の養女として十三代將軍徳川家定に輿入れする際に養母役を務めた。島津側の世話役が西郷隆盛で、それが縁で村岡は西郷や攘夷運動の指導者である梅田雲浜、清水寺月照上人らと主公忠熙のパイプ役として条約勅許や將軍継承などの画策に加わった。安政五年秋、梅田雲浜らにつづき、十二月六日捕縛され、六角牢屋敷に投獄される。詮議後、翌六年二月二十五日、江戸へ送致され、十月、押込め三十日、松平丹波守（松本藩主戸田侯）預かりの処罰を受けた。維新後、北嵯峨の直指庵を再興して余生を送る。明治六年没（88）。同二十四年、従四位が追贈され、同二十六年五月、村岡をヒロインに歌舞伎「老女村岡九重錦」（東京春木座、早大演博蔵芝居番付）が舞台化される。「岡本肥後

日連日詰問、有難事。

うき世とは兼てしれどもしかすがにかゝるべしとはおもはざりけり

（注）京都には東西の町奉行所があり、二条城に隣接。二月二十五日、発「京檻」送「關東」。初旧臘八人、次十一人、今日十三人、凡三十二人、猶在「獄」中者数人。三月十日、送「江戸」、分属「於諸侯之邸」、基建属「於飢肥藩邸」矣。

巖 鋼 白 雲 外 愁 子 有 誰 憐
人 間 絶 消 息 断 鴻 鳴 暮 天
すがのねの永に春日を今日も又つまはじきして暮しける哉

二十日、出「乎評定所」、三奉行訊問畢、反「邸」。―漢詩一首、引用省略―

十月七日、出「乎評定所」、裁許各有「差」。余坐「禁錮」、於「是免「線綫」、而宿「于旅館」、待「沙汰」。而保養数日。

（注）羽田野敬雄の村上忠順宛書簡⑭（安政六年、『愛知県史 資料編20 近世6 学芸』所収）に「旧冬囚人之警衛、道筋之諸侯方、前代未聞之大そうなる騒にて、当領主杯一度二百斤余相費候与申事ニ御座候」などあり、その続報に当たるものが富田群蔵らの書留『狭蠅乃佐夜藝』（田崎哲郎編著『三河地方知識人史料』所収）

に見える「封廻状」で、「死罪 御小性組仙石右近組曾我権右衛門家来医師春堂養父飯泉喜内 未(安政六年)五十五才」から「押込 三条殿家来富田織部 未四十五才」まで三十二名の裁許結果が列記され、坦堂は軽微な「押込」(蟄居) 処分で済む。

十四日、有下可「帰京」之沙汰上、則発「江戸」。上途、今晚止「於河崎駅」、赴告来始聞「公之喪」。―和歌二首、引用省略―

(注) 主公三条実万は、安政六年(一八五) 十月六日の没。「赴告」は訃報。

十五日、早発、憩「神奈河」、遥眺「横浜」推場見「洋人徘徊者」、窃有「作」。

金川曲

天祖天孫立皇極 神州靈武猛兼寛
阪令許和親(ルビ)約 莫作糶(ルビ)洋一刊(ルビ)看

(注) 幕府は安政六年六月以降、神奈川(横浜)・長崎・箱館三港で、露・仏・英・蘭・米との自由貿易を許可した。「推場」は「榷場」とも書き、専売税を徴収する貿易所(『角川大辞源』)で、具体的には開港とともに設置された神奈川運上所、のちの横浜税関をいう。現在、神奈川県庁本館敷地に「史跡神奈川運上所跡」の記念碑が建っている。「和親約」は安政元年(一八五)と翌年に幕府

が調印した和親条約よりも、前年に調印した修好通商条約を意識したものであろう。「糶洋」は肉食する欧米人をいう。「一刊看」は一瞥の意。

二十二日、済「遠江新居駅」、小憩。曩本陣金刺温徳、接「檻輿」、問「水頭」懇情難「忘、今幸得」還、為過賦「一詩」以謝。

雨晴渡御辺 風急抱関前
長江連碧海 富岳聳青天
愁人泣上船 津吏淚沾掌
豈料有今日 相值且相憐

(注) 「金刺温徳」は新居駅本陣の当主飯田武兵衛。金刺は本姓(「飯田家略系」、『新居町史 資料編九』所収)。父の武兵衛昌秀は三河国宝飯郡西方村(現、豊川市御津町西方)の山本兵三郎茂義の二男で、飯田家の養子となった。本居大平に国学を学び、天保三年(一八三二)の没(40)。実弟(四男)が羽田野敬雄で、三河国吉田の湊神明社及び羽田八幡社祠官の羽田野家に養子となり、本居大平のち平田篤胤に国学を学ぶ。武家伝奏で江戸に往復する三条実万が、嘉永三年(一八五〇)、新居駅の本陣飯田家で昼休みをとった折、学習院の執奏(奏上役)で能書家の実万に、温徳は羽田文庫の額を揮毫してもらっている(『幕末三河国神主記録――羽田野敬雄『万歳書留控』――』清

文堂出版)。そうした縁故から、安政四年(一八五七)、坦堂が密使として江戸に下った折にも、「新居駅本陣飯田武兵衛ニ而中食いたし、酒肴出ス。御関所前、都合よく世話呉候也」と懇篤な接待を受けた(「富田織部東行雑記」五月四日の記事)。

十二月十七日、於「二条」免「禁錮」。

七年正月三日戊辰、拜「故前内相大府公於祠堂」。謁「画像」、有「遺思」矣。方「喪如」今。六日、詣「小倉山二尊院」、拜「先公廟」、哭泣哀慕。

ふしておもひあふぎてしたふぬば玉のをぐらの山に袖ぬらしつゝ

坦堂先生ハ、三条前内府実万公ノ儒臣、富田織部、藤原基建ノ号、蕩々山人、又葆光舎等ノ号アリ。此記ハソノ甥、三上義胤秘書中ヨリ写シトリテ、正気ヲ逆ダテ、邦ヲ憂ル人ニオクル辞識。

「解説」三条家の儒臣「富田織部」は、本姓後藤一郎基建、号は坦堂。右は新出資料で、安政の大獄で罪を問われ、江戸に送致、評定所で詮議、裁許を受けてから京に帰り着き、亡くなった主公の廟に額づくまでの記録。なお、主公「三条実万」は嘉永元年(一八四八)、武家伝奏となり、安政四年(一八五七)、日米修好通商条約への勅許をめぐって幕府側と協調路線を取ろうとする関白九条尚忠と対立

した。翌五年(一八五六) 四月、彦根藩主井伊直弼が大老になると、六月、幕府は勅許を得ないで米国総領事のハリズと日米修好通商条約を調印し、七月には蘭・露・英、九月には仏との修好通商条約を調印する。朝廷では八月、尊王攘夷派が公武協調派の九条尚忠を辞職に追い込み、幕府や水戸藩に無勅許調印を難詰する勅諭を下す。これに対し幕府側は、九月、老中間部詮勝が上京、尊王攘夷派の志士らを統々と捕縛し、吉田松陰を処刑するなど弾圧を加えた。

実万は、同年四月、儒臣富田織部を松平土佐守(土佐藩主山内豊信、妻は実万の養女)らへの密使として江戸に派遣する。その間の記録が「富田織部東行雑記」(日本史籍協会叢書『三条実万手録二』大正十五年刊、に付録)で、そのためか富田織部は嫌疑を受け、翌安政六年(一八五九) 正月、捕縛される。一方、主公実万は、同年四月、謹慎の処分を受け、出家して澹空と号し、十月六日、隠棲中の一条寺村で没する(57)。

○一身許国死兼生 豪氣直玖斃海鯨
丈六鉄槍三尺劍 秋風躍馬向神京

浪士(真木) 牧 和泉守保臣

(注) 「許国」は、身を捨てて国に尽くすこと。「直玖」は推説。義挙の直接行動を比喩したのであろう。「神京」

は京都のこと。「真木保臣」は久留米水天宮の祠官。従五位下和泉守。尊王攘夷派の活動家。文久三年（一八六三）五月、長州を経て上京、学習院に出仕、尊攘派三条実美らと意気投合するが、八月十八日、会津藩・薩摩藩などの公武合体派により尊攘派の七卿とともに追われ、翌十九日、長州に落ちる。翌元治元年（一八六四）六月、各藩浪士で義軍を組織・指揮して上京、長州藩とともに戦うが、「禁門の変」で会津・薩摩藩ほかからなる幕府軍に敗れ、七月二十一日、天王山で自刃した（52）。詩は『真木和泉守遺文』（大正二年刊）、その復刻拾遺『真木和泉守全集』（小川常人編、一九九年刊）に徴しても見当たらない。内容から元治元年の出兵時の作と推定される。

○此春は花鶯も捨にけり我なすわざは国民の事

—二首略—

右三首、今上皇帝（孝明天皇）御製

大君のおほみ心をそよとだにこち吹風の我につたへよ

三条大納言実美卿、長州にての詠

笹竹の世はなほかれとおもふのみ我うきふしのねがひ
成けり

大納言
三条西殿、是も長州にて之詠

（注）「実美」は実万の三男。二男が早世したため実万亡き後を継いだ。文久三年（一八六三）八月十八日、公武合

体派による政変で尊攘派の東久世通禧らと七卿ともに長州に逃れ、さらに元治元年（一八六四）、第一次長州征伐で福岡藩に預けられ、太宰府に三年間幽棲した。右の詠は、左遷された道真の詠を踏まえた作。

「三条西殿」は季（一八二〇）。文久三年（一八六三）八月の政変で長州へ逃れた七卿の一人。孝明天皇に歌道で寵遇を得、権大納言となる。

○ 詠 史（田氏女玉葆画常盤抱孤図）
雪 庄（瀧）簷（檐）風 卷 袂 呱々 求 乳 如何情
他 年 鉄 拐 峰 頭 嶮 呵 叱 三 軍 是 此 声
星 巖

（注）「梁川星巖」（一七九〇—一八五八）は美濃の出身。江戸に出て山本北山の癸疑塾で儒学と詩文を学ぶ。玉池吟社を起し、江戸詩壇に雄飛した。弘化二年（一八四二）帰郷、翌三年上京して勤王の志士らと交流、安政の大獄直前、コレラで急逝する。梅田雲浜と並ぶ攘夷運動の中心人物。筆録の詩は『星巖乙集』巻一「西征集」一所収で、依拠した伊藤信著『星巖全集』（昭和三十一年刊）との異同を（）入りで傍記した。同書によれば、「当時に評判せられて、之を祝して鉄拐山人の印を刻して贈った人まであった」星巖の代表作の一つ。常盤が今若・乙若・牛若の三児を携え、雪中を行く場面は最も人口に膾炙す

る画題（斎藤隆三著『画題辞典』博文館、大正十四年刊）。

II 松尾多勢子をめぐる平田門人たち

《多勢子の血縁・地縁ネットワーク》

以下は解説風に記す。真木保臣の漢詩の次に、
○（都にありける時、ゆへよしある人々と共に暮しける時によめる長歌）

皇の神のしきますうつし世の人にあれ出し
かひや何あれも男ならばみすゝかるしなのゝ
真もり左手に手にきりもちてつるぎたち腰に
とりはぎ家わすれ身もたなしらず其道に出で
つかふはものゝふの数ならずとも御名方の神のみ
たまを賜りてやまと心をふり起しいさみたけびて
道しらぬ人の心の横浜にいよゝつどへる
たふれらにしこのえみしらひとりなくやらひてま
しをむらぎもの心はやれどかにかくに足さへ
たゝぬひるの子のせんすべをなみこひつゝぞをる

（反歌）

たわやめのみをくひあかしなまよみのか
ひなき事を書かぞふ我は
吹風の末野の花うら枯てさびしく

（もあるか）
さはぐむさしのゝはら

加茂川やちどりの声もあだなみの立さはぐ世を
うらみてぞ鳴

の長歌と反歌、和歌二首が筆録されている。「松尾多勢子伝」に付録される「多勢子遺稿」所収形との異同を（）入りで示した。

「松尾多勢子」（多勢とも、一八二〇—四五）は信濃国伊那郡山本村（現、飯田市）の出身で、竹村氏。十九歳の時、伴野村（現、豊丘村、美濃国高須藩領）の豪家、松尾佐次右衛門元珍に嫁ぐ。元珍は漢詩文を能くし淳斎（醇斎とも）と号した。多勢子は飯田の福住清風、その没後は伊達方（掛川市）の依平らに和歌を学ぶ。国学は飯田に流寓した平田門の岩崎長世に学び、のち鉄胤に就いて没後の平田門人となる。二男・三女を育て上げた五十二歳の文久二年（一八六二）、夫の許しを得て上京、尊王攘夷活動に携わり、多くの志士や公卿・女官あるいは野之口隆正・正武父子や大田垣蓮月・高島式部ら国学者・歌人も交わり、上京した鉄胤の寓居に親しく出入りした（「都のつと」、「多勢子遺稿」所収）。嵐牛日記筆録の作品は、いずれもその折のもの。

文久三年（一八六三）二月、平田門の角田忠行らが等持院の足利尊氏らの木像を斬首、その首を三条河原に梟げ

べ、足利尊氏らの罪状を立札に書し、暗に徳川氏が足利氏以上の逆賊であることを糾弾する事件を起こした。実行犯の中に密偵が紛れ込んでいたため平田門の犯行であることが直ちに発覚、京都守護職松平容保は平田門の犯人たちを逮捕、以後、志士に対する幕吏の弾圧も激しさを増した。多勢子も嫌疑を受け、同士のすすめでも長州藩邸に潜伏する。その時、多勢子が長門守毛利敬親に奉った歌が筆録歌の一首「吹風に……」で、後に推敲されたのであろう、異同が認められる(多勢子稿本『都のつと』、「多勢子遺稿」所収)。幕府の凋落を譬喩する歌に感じ入ったのか、敬親公から白鞘の短刀を賜っている。

同年三月末、中津川の平田門間秀矩、肥田通光、市岡殷政(多勢子従弟、長女まさの舅)、多勢子長男誠と次男竹村盈仲が上京して長州藩邸に向き、藩士と談判して帰郷を促し、漸く多勢子は大坂―奈良―伊勢經由で五月上旬無事帰郷した。

伴野村に帰ってから、多勢子は伊那谷に角田忠行らの志士を匿い、元治元年(八六四)十一月、水戸天狗党の伊那谷通過を息子・甥・平田門人たちとともに支援する。慶応四年(八六八)正月再び上京、岩倉具視と志士との連絡役を務め、同家の「女参事」と目される。維新が成って明治二年、帰郷した。

親族の人々とともに早くから和歌・国学を学んでいた

多勢子が初めて石川依平と面語したのは、地元の師清風が在世中の弘化四年(八五七)、夫淳斎ら五名で秋葉山詣をした折のことで、その間の紀行文「道中日記帳」(「多勢子遺稿」所収)によると、正月廿八日出発、如月二日に秋葉山に参詣、五日、菊川加茂の大頭龍権現に参詣してから伊達方の依平を訪ね、「たにぎくなどむらひ、そこいなく物がたりせられ、茶ぐわしなど出し、四方山のはなしにしばらくひまどり、思はず時をうつし、云々」と記され、「千々の々」(「多勢子遺稿」所収)にも紀行中の和歌十首が収められ、

依平うしにまみへて

み山路のやみをたどりてあうのうらの月をみんなとはおもひかけきや

の歌が見える。しかし、その後暫く依平への消息はなく、嘉永元年(八四〇)九月十四日、師清風(九)が亡くなったことを秋葉山詣での人に託して消息、翌年再び消息とともに指導・添削を請い、如月十九日付けの依平の返信が遺っている。多勢子が正式に依平の指導を仰ぐようになったのは嘉永七年(八五〇)からで、長男誠が来訪し、その時、もとめられて依平が詠んだ歌群が、自筆稿本「柳園詠草」(嵐牛蔵美術館蔵、欠本四冊)に収められる――嘉永六

年分詠草を収めた一冊の巻末近く、翌七年分を補記したところに見える。高松亮太氏撮影データによる――。

三月二日、信濃国伊那郡伴野村、①松尾元太郎英珍来る。②母多世子入門。

八十一隣千村平右衛門内、③市岡寛蔵六十賀

市岡翁の六十の賀に寄松祝といふことを、

松数本あり／大木なり 依平
朝日さす岡倍の松の陰しめて多みてさかえて千世も経なむ

北原氏 飯田在座光寺村、④長右衛門実家／⑤

因信ぬしの母刀自の八十賀に、
老の浪よるとはなしに八十瀬行末もはるけき天の中

川
⑥大沢氏 伴野村／農家の宅地をほぎて、／元太郎ぬしの叔父の家なり。

大沢の名にながれつゝあしたづの千世をしめたるすみか也けり

⑦桂堂 松子 原尚斎母／五拾歳の隠宅

原桂堂ぬしの母刀自の閑居を思ひやりて、
庭も若木かつらの若木植たてば老かくるべき陰となりなむ

信濃国伴野村松尾英珍ぬしとひ来て何これとか

たらるゝ中に、その庭に松あまたたり。それが歌よみてよとこはるゝに、

松の尾の山まつ風のかよへばや梢も千世の声あはずらん

②の記述から多勢子も同伴したと錯覚されるが、「松尾多勢子伝」に「長子誠、また歌を依平に学ぶ、左の書信は誠、掛川に行き、親しく依平翁に教へを請ひし時のものなり」として引用される多勢子宛三月六日付けの依平書簡に、「こたびは、御むすこの君来給ひつれば、御ありさまくはしううけたまはりぬ。(中略)こたびはねむごろにの給ひおこせ玉ひて、つきく詠草おこせ給はむの御こゝろ、よろづうけ給はりぬ。云々」とあることから、長男誠(松尾元太郎英珍)が単独で依平を訪ね、多勢子の入門意思を伝えたことが明らかとなる――ただし、依平に提出した入門短冊は夫名義だったらしく、門人録には「松尾佐次右衛門元珍、伊奈郡伴野村、嘉永七年、四十四歳」とある(後藤肅堂著『歌人石川依平』昭和四年刊)。

その折、誠が依平に詠んでもらった歌の対象、③市岡寛蔵は、①誠の妻多美子(たみ)の父親。市岡氏は、山村氏と並ぶ木曾衆、美濃国久々利(現、可児市)の五千石旗本千村氏の家臣で、その飯田役所の重役を代々勤め、

寛藏はその八代目に当たる。——市岡家については飯田市美術博物館編『江戸時代の好奇心―信州飯田・市岡家の本草学と多彩な教養―』（平成十六年刊）参照。

同じく⑤の北原氏因信は、多勢子の父竹村党盈の実兄北原信継の長男、即ち従兄に当たる。伊那郡座光寺村の住。母は③の先々代、市岡氏六代目佐蔵智寛の娘伊佐子。因信の実弟（次男）政武は、中津川の本陣市岡長右衛門の養子となるが、早世。実子政治が幼いため、④七男股政が兄政武の養子となり、市岡長右衛門を継ぐ。元治元年（一八六四）に隠居し甥政治に家督を譲り、多勢子の長女まさ（政子）が政治に嫁いでいる（「市岡家系譜」、北小路健著『木曾路文献の旅／●『夜明け前』探究』所収）。

⑥の大沢氏は「松尾氏系譜」（「松尾多勢子伝」付録）によると多勢子の夫淳斎の弟彦輔で、同じ伴野村小園、大沢曾八郎の養子となる。村沢武夫著『伊那歌道史』（山村書院、昭和十一年刊）によれば、村の庄屋を務め、多勢子と同じく福住清風に和歌を学び、稲彦と号し、清風没後は依平の添削を受けた。一子僊太郎章忠も和歌を岩崎長世に学び、多勢子らと交わる。

- ⑦の原桂堂は『伊那歌道史』によれば、安永三年（一七五五）、伴野村に生れる。通称多門、諱師貞、桂堂、文龜、
- ①松尾左次右衛門誠（源姓、号誠哉）と次男竹村太右衛門盈仲（多勢子実家に養子）、ともに岩崎長世紹介、文久三年（一八六三）入門。
 - ②松尾多勢子（51）、北原信質紹介、文久元年（一八六二）入門。
 - ③市岡長右衛門股政（50）、中津川の間半兵衛秀矩紹介、文久二年（一八六三）入門。
 - ④北原因信の男森右衛門信質（35）、号稲雄、岩崎長世紹介、安政六年入門。その実弟今村豊三郎信敬（32）、岩崎長世紹介、万延二年（一八六二）年入門。
 - ⑤大沢彦輔の一子僊太郎章忠（21）、松尾誠哉紹介、慶応二年（一八六六）入門。

《天狗党・亀山嘉治の伊那谷通過》

嵐牛日記に筆録された長歌に多勢子が「道しらぬ人の心の横浜に いよつどへる たふれらに」と誇っているのは、前掲坦堂の「簗笠記」中の「金川曲」と同様、単なる国粹的な攘夷思想の吐露ではない。開港して間もない文久二、三年には高利を貪る生糸商たちが横浜港に蝟集、生糸の輸出は一気に全輸出額の八割に達した。多勢子の師岩崎長世が、

ゑみしらに糸は買はれて老人のきる衣うすし風な吹

師馨などと号する。隣村阿島（現、喬木村）の交代寄合旗本知久氏の家医。天保三年（一八三三）正月七日没（59）。妻について言及はなく、師貞の子が「正斎」と記されており、尚斎は誤記か。その妻がとし子で、多勢子の仲人という。尚（正）斎は亡父と同じ家屋に住み続けたので桂堂号をそのまま継いだのであろう。父桂堂、文龜は松尾淳斎・誠らと親交があった。その没後、嘉永六年（一八三三）三月十五日、松尾家で催された歌会に、彦輔・志雄（因信の俳号）・元珍（淳斎）・多勢子・土衛（股政）に交じってとし子も参加、その時の和歌・漢詩・俳諧発句に挿絵を添えた「山吹花の香をり」（「多勢子遺稿」所収）が伝存する。依平の詠んだ贈答歌群の顔触れは、当時の多勢子や誠を取り巻く血縁・地縁のネットワークをほぼ伝えるものと見てよい。

なお、最後に記される作は「松尾多勢子伝」などに、誤って、夫とともに依平を訪ねた折の詠とし、中七を「山松庭に」と誤読している。

これら多勢子の親族らは、安政六年（一八五五）、①の北原因信の次男信質が岩崎長世の紹介により平田門の没後門人となったのを皮切りに次々と入門する。「誓詞帳」あるいは「門人姓名録」（『新修平田篤胤全集』別巻昭和五十六年刊、所収）によれば、入門の年月は以下の通り。

きそね

と詠んでいるように、国内市場に生糸が払底し、足利や西陣などの絹織物業者が大きなダメージを受けた。併せて粗悪な洋銀が流入、それに反比例して良質な小判や銅銭が大量に海外へ流出した。輸出品と交換に日本に持ち込まれた洋銀はメキシコ銀貨で、安政六年末から七月上旬の洋銀に三分通用の刻印を打って国内でも通用させた。また銅銭を中国に輸出し、洋銀1ドルに交換すると巨利が得られたのである。日本銀行調査局編『図録 日本貨幣4―近世幣制の動揺―』（東洋経済新報社、昭和四十八年刊）参照。

『夜明け前』の舞台、横浜から遠く離れた東濃の地でも「銭相場引上げに続いて急激な諸物価騰貴を惹き起した横浜貿易の取沙汰ほど半蔵等の心をいららさせるものもない」状況で、半蔵のモデル島崎正樹はその憤激を、どるらるにかふるも悲し神国の人といとなみ造れるものを

国つ物足らずなりなばどるらるは山とつむとも何にかはせむ

などと歌に吐露しないではいられなかった（遺稿『松が枝』昭和二十四年刊）。

そうした状況下、元治元年（一八六四）三月、武田耕雲斎

に率いられる尊王攘夷派の水戸浪士が横浜港の閉鎖などを叫んで筑波山で挙兵し、「天狗党」などと綽名された。

これを鎮圧しようとする藩内保守派の「諸生党」や近隣諸藩などと交戦の末、同年十一月、京都を目指して常陸国大子村を出発、同月二十日、迎え撃つ諏訪藩・松本藩兵と信州の和田峠で交戦して撃破、伊那谷に進路を取る。二十二日、天狗党は上穂（現、駒ヶ根市）の宿に入り、貿易で潤う生糸商「茶碗屋」から冥加金八百両を筆り取っている（田中真理子／松本直子著『水戸天狗党』講談社、一九七七年刊）。

二十三、四の両日、飯田城下を無用な戦火から守るべく、今村豊三郎とその実兄北原稲雄（座光寺村名主）、同家に食客中の角田忠行が上穂宿と片桐宿まで出向き天狗党と交渉、三千両の軍資金提供を申し出て説得し、豊三郎の先導で三州街道を迂回して間道を行軍することに決まった。豊三郎が飯田に馳せ戻って藩中に事情を知らせたところ、郡奉行物頭役から奥の一室に招かれ、天狗党から戦鬪回避のため間道を案内するよう依頼状が届いている、ついでには幕府への建前もあり、内密に間道通過の案内役をしてもらいたいと要請された（今村豊三郎「水戸浪士伊那路通行」、『新編伊那史料叢書』第三卷・昭和五十年復刻、所収）。

政三年（一八六五）、十七歳の時、同郡作原村の小平まき子を娶り、文久元年（一八六一）、二十二歳の時、家督とともに名主役を継いだ。旗本の知行地であった関係上、早くから江戸に往来、漢学を藤森弘庵に、国学を平田鉄胤に学んだ――入門は「誓詞帳」によれば安政五年（一八六五）九月二十一日、十九歳の時で、「藤原嘉治、亀山勇右衛門」と署名している――。在村時には、国学を鹿沼の柿沼広身に、和歌を足利の大河内清香に学んだ。元治元年（一八六四）、二十五歳の時、水戸藩の尊王攘夷派が筑波山で天狗党が蜂起し、嘉治が武術を学んだ水戸藩士栗田源左衛門も脱藩してこれに加わり、拠点を移した先、下野国太平山から諸方に檄を飛ばし、これに応じて嘉治は幼児二人を新妻に託し、五月二十七日、近村の同志らを誘って出兵、筑波山麓に駆けつけたのである。

さて、天狗党の行軍は分宿地片桐・大島宿を出発すると、飯田城下辺りで昼食の頃合いとなる。飯田藩では幕府への手前上、城下十三ヶ町に浪士が少しでも入り込めば市中を焼き払い、籠城する手筈としていた。浪士たちは城下に入り込ませないかわりに、町の者たちで昼食を用意すると取り決めた。浪士たちは城下の西方、鎮守の今宮神社付近に着くと、三々五々休憩、その昼食を取った（「水戸浪士伊那路通行」）。「八束穂の…」はそこで詠

嵐牛日記に筆録される、

○消息文案

八束穂のしげる飯田の畔にさへ君につかふる道は有けり

あらねす矢玉の中は越来れどすゝみかねたる駒の山本

右、二首信濃路登りの浪士の中、中川慎之助詠の二首は、「消息文案」の意味するところは不明ながら、「飯田」の地名や「信濃路登りの浪士云々」の付記から天狗党浪士の作であろうことは容易に想像されたけれども、なかなか調べがつかなかった。その筈で、「中川慎之助」は誤記だったのである。「八束穂の」をキーワードにインターネットで検出し得た「尊王義士甲子記念碑」は明治三十四年、飯田市の今宮公園に天狗党の通過を記念し、顕彰するため建てられたもので、その右側面に「嘉治、通称勇右衛門、下野国之人、在^二水戸勤王軍中^一、元治元年十一月二十四日、於^二此処^一憩、遺^二八束穂詠^一」云々と前置きして「八束穂の」歌を刻しているという説明に逢着、一挙に解決への道が開けた。

「亀山嘉治」は毛叢義泰編『亀山嘉治正義録』（明治四十二年刊）によれば、下野国安蘇郡佐野船越村の人で、天保十一年（一八四〇）、亀山賀治・いのの間に生まれ、安

まれた歌で、明治二十三年、飯田市の今宮公園に天狗党を顕彰、その通過を記念して建てられた「尊王義士甲子記念碑」の右側面に、「嘉治、通称勇右衛門、下野国之人、在^二水戸^一、勤王軍中、元治元年十一月二十四日、於^二此処^一憩、遺^二八束穂詠^一」と前置きして「八束穂の」の歌を刻している。田中・松本著『水戸天狗党』によれば嘉治お気に入りの作で、道中世話になった先に必ず書いて贈ったため、伊那人たちの愛唱歌にさへなつたと記している。

『亀山嘉治正義録』によると、嘉治は次の宿泊地、阿智村駒場の現金屋、折山豊吉宅に短冊と扇面を書き遺しており、短冊四本の内一本が「飯田」と題する「八束穂の」の歌、扇面二本の内一本が「あらねす」の歌であった。後者は伊那郡木の下宿（現、上伊那郡箕輪町木下）での詠で、「故ありて信濃国を過ぎける時、駒ヶ岳よりふきおろす雪風のいと寒かりければ」との前置きがある。試みにインターネットで検索すると、HP「郷土史順礼 阿智村の歴史」の第九章「水戸浪士亀山嘉治の歌」のページに、それらの写真入り紹介があり、現存を確認できる。田中真理子・松本直子共著『水戸天狗党』（講談社、一九七七年刊）によれば「八束穂の」の歌は嘉治お気に入りの作で、道中世話になった先に必ず書い

て贈ったため、伊那人たちの愛唱歌にさえなった、と記している。

『夜明け前』に描かれる通り、天狗党の宿泊する駒場には、多勢子の意を受けた長男誠と角田忠行（暮田正香）、さらに三州街道の隣り宿浪合なみあいから名主の佐源太らが駆け付け、三州街道をこのまま南下するのは道が峻難で浪合には関所もある。東海道に出て上れば、尾州藩の大軍と衝突は必至。木曾谷へ抜けて中山道的美濃路を行くなから、宿駅毎に信頼できる平田門たちがいて、行軍に協力してくれるはずだ——と進言し、予定変更が決まった。

翌二十五日、嘉治は清内路せいないじに宿泊、同門の原武右衛門まよみと初対面、

尊王攘夷の大典によりておもひおこしたる軍旅中、これの信濃国清内路てふ山家に宿して詠る

龜山嘉治

おもひ入るひともなか／＼あらしふく山のおくにも宿りもとむる

原 信好

同じく返し

憂きことのしらでふす日のとことにはやすくも経ぬる山の奥かな

の和歌を応酬する（『龜山嘉治正義録』）。

次の宿泊地馬籠では本陣の同門島崎正樹（文久三年入

門）と一晚語り明かし、嘉治は先の二首を含む七首を記念に書き遺して行く。藤村の目には触れなかったため『夜明け前』に言及はないが、既に前々夜、駒場の陣営から誠が中津川の平田門、市岡殷政（正蔵）や肥田通光（馬風）・間秀矩の三名に宛てて東国義軍（天狗党）の行軍予定を報じ、宿泊等の接待、京撰（上方）情報の提供などを要請し、二十七日には島崎正樹（重寛）が市岡・馬島・肥田・間の四君に宛てて、「尊王攘夷之赤心誠忠之軍隊たまたま邂逅たまたま一宿、察二僕之微志、依二僕乞一助二護於諸君一、仍達啓如レ件」との添書を認めている（『木曾路文献の旅／●『夜明け前』探究』）。

馬籠・落合に分宿した天狗党は、中津川に着くと休憩、本陣の市岡家、庄屋で旅籠田丸屋を営む肥田家などで昼食を取った。龜山嘉治は肥田の請いに任せて直垂ひたたれに、

霜まけもせずに花咲く桜かな

夷等は今吹く風の木のはかな

の二句を書き、それとは別に、

是までは逢見し事も中津川同じ流れの人としりつゝ、他の五首も遺した。「水戸浪士伊那路通行」によれば、

嘉治は「素志貫徹までは吟詠すまじきとてこれ以後フツツリと和歌を作」らなくなったという。

なお、肥田は馬風と号し、中津川以哉派みどりあん緑庵みどりあん四世の

以上、抜粋・摘録して注解を加えて来たが、最後に残された検討課題は、それら記事が誰によってもたらされたか、意識的に選択・筆録したものかどうか、の二点である。

慶応三・四年の日記を含め、改めて点検してみても、

とくに尊王攘夷に関わる言辞は見出せない。また、正月廿二日の上部余白に『西籍慨論』平田 五冊（儒学批判の書、安政五年刊の流布本は四冊）と平田篤胤の著書

が書き込まれていても、嵐牛の蔵書目録には篤胤の著書は含まれていず、また平田門人との親交を示す徴証も見

まとめ

当たらない。

元治二年日記では、二月廿日から廿九日まで、門人目

勝の招請により川崎（現、牧之原市静波）に出掛け、連句

を両吟、指導している。その間、目勝が付句に難渋した

ときの時間潰しであろう、本草書『掌中名物筌』（天保

四年刊）や季吟の伝書『誹諧埋木』（延宝元年刊）を各一

丁〜三丁にわたって抄写している。こうした例に照らし、

摘録記事がすべて禾守との「長風交」（正月十二日〜二

十四日）の間の筆録で、とくに御油へ出杖する前日、二

幕末維新——』（吉川弘文館、二〇一五年刊）参照。

行していた雑記帳から、時間潰しを兼ねて時局的な関心によって筆録されたトピックスと判断される。それらの多くは大坂の公眠からの情報かとおもわれるが、はつきりしない。ただ、そうした〈情報提供〉が、漂泊者まればとに期待される重要な職能の一つであつただけは確かであろう。

（立教大学名誉教授）

——『東海近世』第23号（平成27年9月）掲載——